

《査読論文》

抑圧の歴史から信頼の歴史へ

——カナダの先住民女性の支援コミュニティが生み出す知——

*From a History of Oppression to a History of Trust: Knowledge
Developed based on an Aboriginal Women's Community in Canada*

Keywords: aboriginal women 先住民女性, organizational learning 組織学
習, intersectionality インターセクショナリティ, community コミュニティ,
Quebec ケベック

The purpose of this article is to highlight the contributions of the community development of the Maison communautaire Missinak in Québec, Canada, from the perspective of decolonization. Missinak provides different projects for indigenous women and their children who are victims of violence carried out by the women's partners. We analyze Missinak's practice story by Danièle-Pénélope Guay in collaboration with Caroline Tremblay, two founders of Missinak. I adopt an organizational learning analysis framework to identify the interactive dynamics of this community and use an intersectional approach to fully understand the complexities of Aboriginal women's experiences.

After briefly observing situations of oppression of Aboriginal women, I begin by describing the process of self-rebuilding experienced by Danièle-Pénélope as an indigenous woman. This allows us to identify the necessary

elements that make up this process: 1) having a long-term perspective; 2) creating a relationship with others through mutual listening to different experiences; and 3) having access to communities of different backgrounds and levels. We can see these conditions in the community development of Missinak. In addition, we can see an organic network that consists of different internal and external communities of Missinak: They support each other in order to carry out the Missinak project and to fight against violence against indigenous women. Finally, I conclude that the entirety of this personal and collective process provides us with knowledge leading to ending oppression and opening a path toward building a history of trust.

はじめに

2017年、アメリカ大統領トランプの難民・移民受入れを制限した政策を受けて、カナダ首相トルドーは「多様性は、我が国の強みである」とTwitter上につぶやき、全世界で38.2万件リツイートされた¹。カナダ政府も、多文化主義をカナダの豊さの根幹として世界に発信している²。しかし、北米の厳しい大地で人間生活の営みを切り拓いてきた、カナダ全体の人口の約4.3%を占める先住民の人々³の現状はどうだろうか。

¹ Justin Trudeau (@Justin Trudeau), “To those fleeing persecution, terror & war, Canadians will welcome you, regardless of your faith. Diversity is our strength #WelcomeToCanada”, Twitter, January 29, 2017, <https://twitter.com/JustinTrudeau/status/825438460265762816>.

² 例えば、在日カナダ大使館のホームページの「カナダについて」というページでは、「多様で多彩な社会が織りなす豊かさと革新性を備えた国」という標語を掲げている（「カナダについて」, Government of Canada, accessed March 28 2020, https://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a_propos/index.aspx?lang=jpn）。

³ 本稿では、先住民とは、ファースト・ネーションズ、メイティ、イヌイットの人々のことを指す。ケベック州ではその人口の2.3%にあたる先住民の人々がいる。

長い間、先住民社会は、大地とのつながりの中で生命の循環を尊重して機能してきた。男性、女性、2ELGBTQQIA⁴の人々、子ども、高齢者、それぞれがこの世界の生命の循環の一部であり、その活性化の責任を担う主体として存在していた。しかし、100年以上にわたってカナダ政府が先住民に対して行ってきた植民地主義政策は、こうした先住民社会を徹底的に破壊してきた。今日、先住民の暮らしは、アルコール依存、暴力、性暴力、薬物依存、失業、自殺等の問題を抱えている。それにもかかわらず、カナダ政府は、2010年まで先住民の権利に関する国連宣言の採択の批准に反対するなど、この問題に対して不誠実な態度をとり続けてきた。1990年代に入り、カナダ政府は、先住民とカナダ政府の関係の検証によりやく着手し、2008年には、先住民社会が抱える深い傷の主要な原因であるインディアン寄宿学校への強制入学問題⁵に対して、当時のカナダ首相ハーパーが先住民の人々に謝罪をした。2015年、カナダ政府の命を受けて発足した「カナダ真実の和解と調査委員会」(CVR)が、6年間に及ぶインディアン寄宿学校問題に関する全国調査の報告書を発表し、植民地政策に対して「文化的ジェノサイド」という認識を示した⁶。また、2016

⁴ バイスピリチュアル、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クィア、クエスチョニング、インターセクシュアル、ア・セクシュアルの人々のこと。

⁵ インディアン寄宿学校（以下、寄宿学校）には、1880年代から1996年ごろまで、ヨーロッパのキリスト教的カナダ社会の支配的文化に同化させることを目的として、先住民の子どもたちがリザーブ（居留地）に住むその家族と文化から引き離され、送り込まれてきた。主にはキリスト教団体によって運営されていたこの寄宿学校は、カナダ全体で約130校設置され、約15万人のファースト・ネーションズ、イヌイト、メイティの子どもが入学させられた。子どもはそこで、自身の言語を話すことが禁じられ、職員らによって、身体的、精神的、精神的暴力を受け、食事や医療も十分に与えられなかった。中には、家族のもとに戻る事が出来ずに亡くなる子どもも多かった。現在、生存者は約8万人いると言われている。(la Commission de la vérité et de la réconciliation du Canada (CVR), *Honorer la vérité, réconcilier pour l'avenir. Sommaire du rapport final de la Commission de la vérité et de la réconciliation du Canada*. On line 2015. http://www.trc.ca/websites/trcinstitution/File/French_Exec_Summary_web_revised.pdf, 3-4.)

⁶ CVR, *Sommaire du rapport*, 1.

年トルドー政権下で発足し、2019年6月に最終報告書を発表した「行方不明または殺害された先住民の女性と少女に関する全国調査」(ENNFDA) 委員会は、植民地政策が長期間にわたっており、先住民の人々——女性、少女、2ELGBTQQIAの人々も含んで——に対する暴力が未だ解決されていないことから「ジェノサイド」と主張した⁷。

この全国調査は、カナダ各地で、正確な調査がなされないままにあった、先住民の女性、少女、2ELGBTQQIAの人々の行方不明または殺害の原因と解決のための提言を行うものであった。同調査の実施に至るには、先住民問題に対するカナダ政府の対応への国際社会の批判が後押しした。しかし、とりわけ重要なのは、被害者の家族や支援者らの告発、そして1968年以来、先住民女性の権利擁護を訴え続けてきた先住民女性たちのアクションが、調査の実施へと導いたことである。そして、先住民女性団体は、調査の遂行にあたり、調査委員会への助言や、精神的・スピリチュアルのサポートを提供することで、この全国調査が、行方不明または殺害された先住民の女性、少女、2ELGBTQQIAの人々の尊厳を回復するものとなるよう支えてきた。その中の先住民女性団体の1つが、本論文で取り上げるカナダ・ケベック州で活動する「ミシナク共同ハウス (Maison communautaire Missinak)」(以下、ミシナク)である。同調査の最終報告書の「序文」には、ミシナクの名前と設立者であるダニエル＝ペネロプ・ゲイのインタビューが掲載されている⁸。このダニエル＝ペネロプ・ゲイは、調査委員のミシェル・オデットのグランメール⁹として、同調査に関

⁷ Enquête nationale sur les femmes et les filles autochtones disparues et assassinées (ENNFDA), *Réclamer notre pouvoir et notre place. Le rapport final de l'enquête national sur les femmes et les filles autochtones disparues et assassinées. Volume 1b*. On line June 3 2019. <https://www.mmiwg-ffada.ca/wp-content/uploads/2019/06/Rapport-final-volume-1b.pdf>., 59.

⁸ ENNFDA, *Le Rapport final*, 35-52.

⁹ グランメールは、フランス語で「おばあさん」の意味。委員たち各々につき「助言者」としての役割を果たしたり、全国調査での先住民のスピリチュアルな儀式を執行する。

わった。それは、先住民女性として、彼女が先住民女性たちの抑圧の歴史を克服していく営みの中で培ってきた知見が求められたということである。

そこで、本論文では、カナダにおける先住民女性問題の状況を変革するために、先住民女性たち自身が主体となって、長期にわたり取り組んでいる、ミシナクの実践が培ってきた抑圧的な歴史を克服していくための知を明らかにしたい。近年の学習研究は、学習者を「世界を構成する活動の主体」として認識し、パウロ・フレイレが銀行型教育として批判したような¹⁰、教師と学習者の非対称な権力関係に基づく脱文脈化された知の伝達を克服しようと試みている¹¹。特に、日本の社会教育学の学習研究は、長期にわたる実践記録を軸にした実践分析研究を土台としつつ¹²、ユーリア・エンゲストローム¹³、エティエンヌ・ウェンガー¹⁴、ドナルド・A・ショーン¹⁵らの研究に学び、学習を次のように捉える。すなわち、学習とは、実践の生成と展開を通して形成されるコミュニティがその過程で課題や困難を克服していく営みであり、それによって、文化的・歴史的・社会的に新たな活動構造を生み出していくダイナミックな営みなのである。このような学習観のアプローチからの学習研究は、実践記録に焦

¹⁰ パウロ・フレイレ、『被抑圧者の教育学』、小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳、亜紀書房、1979、63-79。

¹¹ 宮崎隆志、倉持伸江、三輪建二、「学習研究の転換と専門職教育改革」、日本社会教育学会編『学びあうコミュニティを培う——社会教育が提案する新しい専門職像』、東洋館出版、2009、209-210。

¹² 柳沢昌一、「学習過程研究の方法と課題」、日本社会教育学会編『現代成人学習内容論』、東洋館出版社、1989：97-108。

¹³ ユーリア・エンゲストローム、『拡張による学習——活動理論からのアプローチ』、山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登訳、新曜社、1999。

¹⁴ エティエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー、『コミュニティ・オブ・プラクティス』、野村恭彦監修、櫻井祐子訳、翔泳社、2012。

¹⁵ ドナルド・A・ショーン、『省察の実践者の教育——プロフェッショナル・スクールの実践と理論』、柳沢昌一・村田晶子監訳、鳳書房、2017；ドナルド・A・ショーン、『省察の実践とは何か——プロフェッショナルの行為と思考』、柳沢昌一・三輪建二監訳、鳳書房、2009。

点化し、具体的な実践の展開プロセスの分析を通じて、既存の公教育における組織改革を進めていくために必要な諸条件やシステムを提起することに寄与している¹⁶。他方、女性問題学習研究を除いては¹⁷、既存の社会システムに構造化されているジェンダー、セクシュアリティ、人種や民族などに基づく権力の諸関係を考慮に入れて、今日の社会構造や歴史、組織文化を問い、その変革を支える学習のあり方を問う研究は、ほとんど手つかずの状態と言える。

先住民女性問題に関する研究については、日本国内の社会教育学¹⁸、カナダ教育研究においてほぼ皆無と言える。また、本論文で取り上げるミシナクが活動するフランス語圏の研究状況を概観すると、近年、ようやく研究のテーマとして取り上げられるだけでなく、先住民女性問題の視座から大学教育やアカデミズムを問い改革していく動きも見られる¹⁹。しかし、先住民女性たちの実践の内実を可視化させる実践分析研究は行われていない。

以上、本研究では、上述した学習研究の蓄積をふまえつつ、実践を分析する枠組みとして、脱植民地化とインターセクショナリティのアプローチをとる。構成は、以下の通りである。第1章で、分析の枠組みとして用いる、脱植民地化と、インターセクショナリティの概念を整理する。第2章で、先住民女性に対する抑圧状況について説明する。第3章で、ミシナクの実践の分析を行う。具体的には、①ダニエル＝ペネロプ自身が、自らの被抑圧状況を自覚してから先住民女性の支援者となっていくプロセス、②ミシナクの設立とその後の

¹⁶ 柳沢昌一、「社会教育実践研究の現在」、『教育学研究』, vol. 45, no. 4, 2008 : 405-412; 日本社会教育学会編『学びあうコミュニティを培う——社会教育が提案する新しい専門職像』, 東洋館出版, 2009.

¹⁷ 村田晶子、『女性問題学習の研究』, 未来社, 2006.

¹⁸ 管見では、島崎直美、「アイヌ民族女性の学びの歴史と課題」(日本社会教育学会編、『日本の社会教育 第58集 アイヌ民族・先住民族教育の現在』, 東洋館出版社, 2014, 66-70) が、アイヌ民族女性による解放運動とそこでの学習を跡づけ、アイヌ民族女性の抑圧状況を克服するための教育的課題を指摘しているのみである。

¹⁹ Léger, Marie, et Anahi Morales Hudon, « Femmes autochtones en mouvement : fragments de décolonisation », *Recherches féministes*, vol. 30, no. 1, 2017, 5.

展開に焦点化する。その方法はダニエル＝ペネロプとキャロリーヌ・トランブレーが共同で執筆した実践記録「ミシナク＝カメの歩み」と、2人へのヒアリング調査の記録²⁰を、脱植民地化とインターセクショナリティのアプローチから分析することである。

1. 分析の枠組みの設定

(1) 分析の枠組み

まず、本稿では、先住民の女性たちが現在置かれている状況には、植民地主義支配の影響があることから、脱植民地化のアプローチをとることとする。すなわち、脱植民地化を、フランツ・ファノンの述べる、植民者自身の人間化をも伴う、被植民者自身の人間性の回復に向けた集団的営みを通じた、被植民者と植民者の新たな関係の創出のプロセスとして捉える²¹。これは、今日のカナダの文脈で言えば、CVRにおける、「和解のプロセス」と呼ぶことが可能であろう。

調査委員会は、和解を尊重し合う関係を築き保つことを目指し続けるプロセスとして定義する。このプロセスの最も重要な要素は、謝罪を示し、個人的かつ集団的な償いを認め、真の社会の変革を証言するアクションを具体化することによって、信頼関係を回復することなのである。尊重し合う関係を築くためには、同様に、先住民の諸権利と法的伝統を再興しなければならない。全てのカナダ人が、対立の解決、過ちの償い、つながりの再構築に関して、ファースト・ネーションズ、イヌイット、メイティの人々

²⁰ 2018年5月23日、13時～15時30分、於：Maison communautaire de Missinak, 8155 1er avenue, Québec. 設立者のダニエル＝ペネロプと、キャロリーヌ・トランブレーへの2人の意識化の経験とミシナクの取り組みに関するヒアリング調査の実施。

²¹ フランツ・ファノン『革命の社会学』、宮ヶ谷徳三・花輪莞爾・海老坂武訳、みすず書房、2008、14。

の伝統的手法が和解プロセスをどのように提起しているのかを理解することが重要である²²。

CVRにおいて和解の達成を意味するものは先住民側の許しではない。和解とは信頼の回復であり、それに向けては、非先住民であるカナダ人自身が先住民の知から学び、この問題と向き合うアクションに取り組む必要がある。しかも、このプロセスは、先住民族の人々が植民地化によって受けた傷の長期にわたる癒しのプロセスを支えるものでなければならない²³。

したがって、本稿では、ミシナクの実践の展開とその価値を、植民地主義に基づく被植民者と植民者の間の支配関係から、傷の回復、相互的尊重、先住民の諸権利、文化、法的伝統の尊重と復興、植民者の学びに基づく信頼関係の構築のプロセスという文脈に照らして検討したい。

次に、本稿では、インターセクショナリティを、キンバール・クレンショーによるインターセクショナリティ概念と²⁴、インターセクショナル・フェミニズム教育²⁵、全国調査²⁶におけるこの概念の検討を吟味した上で、次のように整理する。第1の側面としては、この語は、クレンショーが用いたように、複合的かつ同時に経験される差別のことを指し、フェミニズムや全国調査が特に重視している、その差別状況を構成する抑圧的な権力の諸システムの相互作用

²² CVR, *Sommaire du rapport*, 19.

²³ *Ibid.*, 8.

²⁴ Crenshaw, Kimberle, “Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics”, *University of Chicago Legal Forum*, Volume 1989, Issue 1, Article 8 (1989) : 139-167.

²⁵ Louise Lafortune, Lige Gervais, Berthe Lacharité, Josiane Maheu, Anne St-Cerny, Nancy Gubermas, Danielle Coenga-Oliveira et Priscyll Ancetil Avoine, « La pédagogie féministe intersectionnelle socioconstructive de Relais-femmes dans son travail d’accompagnement-formation : des compétences à développer », *Recherches féministes*, vol. 31, no. 1, (2018) : 46-64.

²⁶ ENNFDA, *Le Rapport final* : 101-123.

用的関係性に光を当てる分析の概念である。第2の側面は、クレンショーが当初から既存のフェミニズム理論や反人種差別理論の枠組みの限界を指摘し、黒人女性の権利を十全に保障するための理論的枠組みの構築を主張するためにこの語を用いた企図を引き継いでいる。すなわち、具体的な状況の分析ツールとしての役目だけではなく、平等の構築、抑圧関係の変革、社会正義の実現というプロジェクトを担っている。

そこで、ミシナクの実践記録の分析において、インターセクショナリティ・アプローチを用いることは、第1に、先住民の女性が経験する複合的な差別の状況とその構造への着目を意味する。第2に、社会正義の実現のプロジェクトという観点から、先住民女性の轢き割かれ傷ついたアイデンティティの回復へと導く契機と、他者との関係をより良い方向へと転換させていく契機に光をあてることを可能にする。すなわち、先住民の女性自身が語る実践の展開に編み込まれた諸関係の結び目に焦点化する。

(2) 分析する実践記録について

本論文で取り上げる実践記録「ミシナク——カメの歩み」は、「ケベック意識化グループ (Collectif québécois de conscientisation: CQC) が出版した実践記録集『ケベックの意識化の理論と実践』(2012年)に収められている²⁷。この実践記録集は4部で構成されており、ミシナクの記録は、第2部「あらゆる実践分野に通ずる方法」の中にある。設立者である、ダニエル＝ペネロプが、同じく設立者であるキャロリーヌ・トランブレールと協働で執筆している。ミシナクの記録で公開されているものは、この記録のみである。

CQCとは、1983年から2018年までケベック州で活動をしていた、ケベック

²⁷ Caroline Tremblay en collaboration avec Danièle-Pénélope Guay, « Missinak : sur les pas de la tortue » dans Gisèle Ampleman, Linda Denis et Jean-Yves Dégagnès (dir.), *Théorie et pratique de conscientisation au Québec* (Québec : Presses de l'Université du Québec, 2012) : 42-69.

において民衆教育実践に取り組むコミュニティ・オーガナイザー、労働組合職員、フェミニスト活動家、保健師など多領域の実践者や研究者によって構成された学習グループである。ブラジルの教育者、パウロ・フレイレの意識化を実践的かつ理論的なアプローチとしている。

したがって、ミシナクは、ケベックにおける民衆教育運動の文脈に位置づく省察的实践コミュニティである。その記録は、4つの歴史によって構成される。最初は先住民社会の抑圧の歴史、次にミシナクの設立者の抑圧の歴史、それからミシナク設立前史、最後はミシナクの歴史である。特に、2つ目の設立者の歴史では、インディアン法における性差別規定を廃止させる運動を担った3名の先住民女性活動家にも言及されており、この個人的歴史が、先住民女性に対する抑圧の集団的歴史の一部であることを物語っている。また、最後のミシナクの歴史は、この記録の大部分を占めており、11段階に分けてミシナクの展開のプロセスを描いている。以上の構成から分かる通り、ミシナクは、自らを先住民女性たち自身による植民地主義に基づく抑圧的状况からの変革の運動の担い手として認識していると言えよう。

2. カナダ・ケベック州における先住民女性の状況

今日、先住民社会は、あらゆる暴力が蔓延している。とりわけ、先住民の女性の状況は深刻である。

2014年、カナダ国家憲兵隊は行方不明または殺害された先住民の女性に関する初の公的調査を実施した²⁸。その結果、1980年から2012年にかけて、警察に通報のあった行方不明あるいは殺害された先住民女性の数は1,181名に及ぶことがわかった。そのうち、1,017名が殺害されているが、それは同じ期間で、

²⁸ *Les femmes autochtones disparues et assassinées : Un aperçu opérationnel national*, (2014), Gendarmerie royale du Canada, accessed September 1, 2018, <http://www.rcmp-grc.gc.ca/aboriginal-autochtone/,,aw-fada-fra.htm>.

女性が被害になった殺害事件（カナダ全体の殺害事件は20,313件で女性被害者数は6,551名）のうちの16%（1,017件）にあたる。この数字は、カナダの女性の人口に先住民女性が占める4.3%（718,500人）という数字よりも高い割合である。そして、殺害された女性たちの90%以上が、配偶者、親、近親者、知人によって殺害されている。

この行方不明または殺害事件の背景には、先住民女性たちが、日常的にさらされている暴力の現状がある。カナダ統計局の調査では、配偶者あるいは元配偶者から身体的あるいは性的暴力を受けたことのある先住民女性たちは、非先住民女性たちと比較して、3倍以上になることがわかっている²⁹。

以上の状況は、1869年にカナダ政府が制定したインディアン法の下で行われてきた様々な植民地政策の結果である³⁰。この政策下では、先住民族の人々は登録先住民・非登録先住民に区分される。登録先住民はリザーブに住む権利を含め、伝統的な先住民の暮らしを営む権利が与えられるが、政治的決定権は持たず、もう一方の非登録先住民は、「自由化」の名の下に、カナダ人に同化されることとなった。しかも、この規定は、ジェンダー差別的な規定であった。すなわち、先住民女性は、白人男性、または非登録先住民男性と結婚すると、自動的に先住民の地位を失い、その子どもに先住民の地位が継承されない。しかし、先住民男性が、白人女性と結婚しても先住民の地位は維持され、その子どもも自動的に先住民となる。この規定は、1985年に改正され、地位を失った先住民女性の再登録が可能になった。しかしながら、再登録した先住民女性の孫の地位の継承は、子どもの配偶者の選択次第（登録先住民であるか否か）とな

²⁹ « Contexte de vulnérabilité : femmes autochtones », Centre d'expertise et de référence en santé publique, accessed September 3, 2018, <https://www.inspq.qc.ca/print/violence-conjugale/comprendre/contextes-de-vulnerabilite/femmes-autochtones>.

³⁰ *Discrimination des femmes autochtones. Mémoire*, (2001), Femmes autochtones du Québec, on line November 5, 2013, accessed September 3, 2018. http://www.faq-qnw.org/wp-content/uploads/2016/07/memoire_discrimination.pdf.

った。一方、非先住民女性と結婚した先住民男性の場合、孫への地位の継承は自動的である。なお、改正後のインディアン法は、地位を再取得した女性に対する差別を防ぐ規定を一切設けていない。しかも、ケベック州先住民女性の会の報告書では、バンド会議（インディアン法で規定されている先住民組織であって、自治的なものではない）による再登録先住民女性に対する諸差別（リザーブに居住する権利や、それに付随する権利が拒否されるなど）も報告されている³¹。このように、独自の世界観や社会システムを構築していた先住民社会になかった、西欧の家父長制構造を反映したインディアン法における性差別的規定は、先住民の女性と子どもから、コミュニティとのつながりや、先住民の文化的・スピリチュアル的生活を送る権利を奪い、世代間継承を断絶させ、アイデンティティの亀裂を生じさせた³²。

さらに、先住民の女性に対する暴力の背景には、コミュニティ内の暴力の世代間連鎖の問題がある。1880年代から1996年ごろ、先住民の子どもたちはインディアン寄宿学校へ強制的に入学させられてきた³³。1960年代には、児童養護政策として、先住民の子どもを家族から引き離して、非先住民の家庭で育てる里親養育政策が実施された。これらの寄宿学校や里親家庭では、子どもに対するあらゆる虐待がなされた³⁴。当事者の子どもたちは、大人になった後もトラウマに苦しみ、それが暴力の世代間連鎖を生じさせる要因となった。また、残された家族やコミュニティも子どもの喪失で多大なる打撃を受け、コミュニティ全体に深刻なトラウマを残すこととなり、先述の様々な問題を抱えることとなったのだ。

³¹ *Ibid.*, 9–12.

³² Kaine, Elisabeth (dir.), *Voix, visage, paysages : Les Premiers Peuples et le XXI^e siècle*, Québec : Presses de l'Université Laval, 2018, 114.

³³ 詳細については注5を参照されたい。

³⁴ ENNFDA, *Rapport provisoire : Nos femmes et nos filles sont sacrées*. On line August 4 2018. <http://www.mmiwg-ffada.ca/wp-content/uploads/2018/04/nimmiwg-interim-report-revised-french.pdf>, 31.

しかしながら、長年にわたり、こうした先住民コミュニティの問題を、カナダ社会はタブー視してきた。メディアで、先住民の女性たち、少女たち、2ELGBTQQIAの人々の行方不明あるいは殺害事件がごくわずかながらも取り上げられるようになるのは、2004年アムネスティ・インターナショナルが同問題に対してカナダ政府を告発するレポートを発表してからである。メディアでの報道が増加し始めるのは、2012年、各州首相と先住民団体のリーダーが2日間にわたって集まった、行方不明・殺害された先住民女性たちに関するカナダ・サミットの開催以降である。また、警察でも十分な捜査を行って来なかった。先住民女性を、“売春婦”、“アルコール依存症”などとステレオタイプ化して捉え、さらに先住民差別、性差別、職業差別などに基づく偏見により、事態を軽視、あるいは無視してきたのである。

3. 先住民女性の尊厳の回復を支えるコミュニティの形成と展開

(1) ミシナクの概要

以上のような状況にある先住民の女性、子ども、男性、コミュニティ全体の支援をするためにミシナクのプロジェクトが始まった。まずこのプロジェクトの概要を説明する。

2001年に始動したミシナク・プロジェクトは、現在、ケベック市の中心から離れた住宅街に宿泊型保護施設（ミシナク共同ハウス）、ワークショップなどを行う施設（マミュック・センター）、自然の広場（メシュカヌー）の3つの支援の場を設けている。事業の柱は、次の3つである。

- ①〔配偶者から暴力を受けた先住民の女性と子どものための〕宿泊施設の運営
- ②宿泊を必要としない男女のための外部からの支援
- ③先住民のスピリチュアルな文化的習慣と伝統との自らのつながりを取り

戻し、非先住民の人々が先住民をより良く理解し先住民とのつながりを作ることが出来るように非先住民の人々と先住民の習慣と伝統を共有するための自然の中の広場の運営

ミシナクでは、先住民のスピリチュアリティに基づくアプローチと意識化のアプローチを通して活動に取り組んでいる。「ミシナク」は、先住民のイヌー族の言葉で「カメ」を意味しており、その足が「母なる大地」にしっかりとついていること、甲羅という避難場所をもっていることから、ミシナクのシンボルとして選ばれている³⁵。ロゴのカメの甲羅には、4色の羽が描かれている。先住民のスピリチュアリティを想起させる色——黄、赤、黒、白——は、先住民女性たちの状況を全体論的に捉えようとす、ミシナクのホリスティック・アプローチをイメージしている。名前とロゴは、「〔先住民の〕女性たちと男性たちのアイデンティティへの誇り」を表明しているのだ³⁶。



①ミシナクのロゴ（ミシナク ホーム ページ <http://www.missinak.org/>, 2018年11月4日最終アクセス）

	黄色	赤	黒	白
人間の側面	スピリチュアルな側面	感情的側面	身体的側面	精神的側面
地球上の四民族	アジア人	先住民	アフリカ人	ヨーロッパ人
四方位と結びついたライフステージ	東—誕生	南—青年期	西—成年期	北—老年期と靈魂世界

②ミシナクのイメージカラー（Guay et Tremblay, “Missinak”, 49より筆者作成）

³⁵ Guay et Tremblay, “Missinak”, 52.

³⁶ *Ibid.*, 53.

また、ミシナクは、意識化アプローチも取り入れている。「個人的な歴史と、その文化を出発点にして、抑圧された人が、他者の歴史と文化とのつながりを持ち、社会階級とその各階級における権力（この場合、先住民の民衆層に対するカナダのブルジョワジーの権力のこと）に基づく分析を通して、自身の歴史から、集团的歴史の理解を引き出せるようになる」ことである³⁷。これら2つのアプローチは、不可分であり、組織運営、プロジェクト、活動、空間づくりなどにおいて一貫して組み込まれている。

ミシナクの理念は次の通りである³⁸。

ミシナク共同ハウスの根っこは、
私たちの誇りと、私たちの先住民の尊厳にあり、
また私たちの祖先の尊厳にあります。
そしてミシナク共同ハウスは、そのことを広く伝えることを約束します。
ミシナクは、すべての人びとの
個人的かつ集团的な癒しのプロセスのために
相互の尊重と正義において、
協同して働くことを約束します。

(2) ダニエル＝ペネロプ・ゲイの歩み

ミシナク設立者のダニエル＝ペネロプの歩みを、ミシナクの記録とヒアリング調査から跡付ける。先住民の母親と、非登録先住民の父親との間で生まれた。したがって、母親は父親との結婚によって先住民の地位を失い、コミュニティを離れて生活しなくならなくなった。ダニエル＝ペネロプもまた、この2人の子どもでもあるがゆえに、先住民の地位は継承されずコミュニティで暮らすことはできなかった。両親は離婚するが、母親は、離婚した後も、先住民

³⁷ *Ibid.*, 49.

³⁸ *Ibid.*, 52.

の地位を取り戻すことはできないため、母親とダニエル＝ペネロプとその兄弟たち4人は、小さな村で暮らしてきた。それは、ダニエル＝ペネロプにとって「難しい時代」であった³⁹。その村で、フランス語系の学校に通い、フランス系カナダ人の歴史、言葉の教育を受けた。しかし、そこでは先住民であるために「野蛮人」として扱われ続け、自身が先住民であることを恥として捉えるようになっていった。また、ダニエル＝ペネロプは、12歳で、生活保護を受給して暮らす母親を助けるために働き始めた。20代、宗教の教義にそまっており、結婚し、その後4人の子どものシングルマザーになる。暴力、貧困、依存症を経験する。この間の自身の意識について、ダニエル＝ペネロプは、貧困の中を生きていることを「恥」として捉えたり、先住民のコミュニティから自分たちは見棄てられていると感じたり、それにより他の先住民の人々や、自分自身を憎いという意識を抱いて生きていたと語る。このようなダニエル＝ペネロプの、先住民として、女性として、貧困者として受けていた複合的な差別の状況を脱していく転機は何だったのか。

記録やインタビューからは、自分自身を1人の人間として認めてくれる友人や、仲間として活動することになった団体との出会いが見えてくる。とりわけ重要な経験は、1980年、ローヴェルバル地区の生活保護受給者の社会的権利擁護協会（RPAS）と、そのメンバーであるジャン＝イヴ・デガニェとの出会いである。RPASでの5年間のボランティア経験は、ダニエル＝ペネロプに、貧困や生活保護受給者であることを恥とする認識から、それは社会的に構築されたものであるという認識への転換をもたらす。このことを、記録では次のように述べている⁴⁰。

ダニエル＝ペネロプは、被抑圧者の状況の中にいるのは自分だけではないということ、自分には権利があり、組織化し行動するために誰かの仲間

³⁹ *Ibid.*, 43.

⁴⁰ *Ibid.*, 44.

なれば自分も何かが出来るのだということに、ゆっくりと気がついていきます。彼女は、自分の歴史が、個人的かつ集団的な抑圧の歴史であることを自覚するのです。そこで、シングルマザーの、先住民の、生活保護受給者の女性として、彼女は、RPASとともに自らの権利のために活動し、CQCに積極的に関わります。

しかも、この頃、インディアン法が改正され（1985年）、ダニエル＝ペネロプは、娘ナタリー、母ローズ・マリーと、親子3世代で、再び先住民の地位を取得する。それは、まさに、家長長制的な植民地政策の中で奪われた、先住民女性としてのアイデンティティの再構築の一步であり、この記録ではこの後3名の先住民女性活動家たちについて言及しているように、先住民女性の権利擁護運動の文脈のできごとである。

ジャン＝イヴが関わっていたCQCとの出会いは、ダニエル＝ペネロプの意識を大きく転換させる。ジャン＝イヴは、ブルジョワジーであり、専門職についており、非先住民で、男性という、ダニエル＝ペネロプとは異なる経験を生きていた。しかし、このような異なる経験をもった他者と仲間として連携する活動に参加し、その中で、互いの経験を「教え合う」関係を築く⁴¹。それは、自身の人生を、また社会を構築する主体として自己を捉えるとともに、変革の実践における省察の重要性を実感する契機となる。それはまた、支援者としてのダニエル＝ペネロプの力量を培う経験でもあった。この経験を、ダニエル＝ペネロプは、「最初の意識の覚醒」と呼んでいる⁴²。なお、このCQCで、ミシナクの共同設立者である、非先住民で活動家のキャロリーヌとも出会うのである。

その後、ジャン＝イヴの提案で、CGÉP（大学基礎教育機関）と、大学でソ

⁴¹ 2018年5月23日のヒアリング調査でのダニエル＝ペネロプの言葉。

⁴² 同上。

ーシャル・ワークを専攻する。大学では先住民の歴史も学び、その後先住民のコミュニティでソーシャル・ワーカーとして働くことで、ダニエル＝ペネロプは、自分や母の文化とつながり、自身のルーツと再会し、先住民としてのアイデンティティを再び見出す。そして、自身にとっても、また多くの先住民にとっても、忘れられていたスピリチュアリティの実践を再び試みることにしたので。

ダニエル＝ペネロプはそれら〔先住民の伝統的なスピリチュアリティの儀式〕に居心地の良さを覚えます。自分の仕事の中で困難なことを成し遂げていくのに必要な支えがあることを発見するのです⁴³。

また、ソーシャル・ワーカーとして先住民コミュニティで働くことで、西欧文化を反映した枠組みの個人的アプローチも、コミュニティ・アプローチも、困難な状況にある先住民女性を支援するには限界があることに気がつく。それらは、先住民の人々のスピリチュアリティの側面を考慮していなかったからだ。スピリチュアリティは、先住民の暮らしにとって、それが先住民文化のものでも、カトリックのものでも、欠くことのできないものであった。

娘ナタリーもまた、ダニエル＝ペネロプと類似した経験を辿り、スピリチュアリティの重要性を実感する。そして、ダニエル＝ペネロプ、ナタリー、キャロリーヌはミシナクのプロジェクトを立ち上げることにしたのである。

(3) 歩みを支えたもの

以上のダニエル＝ペネロプの歩みは、先住民・シングルマザー・生活保護受給者などといった幾重もの困難を抱え孤立した状況から、仲間とのつながりの中で自己を見いだす状況へ、そして貧困という問題状況の捉え直し、先住民の

⁴³ Guay et Tremblay, “Missinak”, 46.

地位の再取得、変革者としての自己の認識、先住民アイデンティティの捉え直しへと向かっていった道程である。それは、恥や憎しみといった感情で認識されていた、壊れ裂かれたアイデンティティの再構築のプロセスであると同時に、先住民女性の支援者としての力量を形成していく、20年以上にも及ぶ長期にわたるプロセスでもある。

このようなプロセスを構成する転換点の特徴は、次の3点である。第1は、ダニエル＝ペネロプ自身とは全く異なる経験をもつ他者との出会いである。反対に、第2は、自分と同様の経験をもつ人々のコミュニティとの出会いである。第3は、出会った人々を通したコミュニティとの出会いである。このような転換点は、仲間との出会いという点で共通している。それは、ステレオタイプ化された他者との出会いでも、ダニエル＝ペネロプが被支援者としてこうした他者と出会ったのではない。コミュニティの一員として関わったり、互いの経験を「教え合う」関係を築いた経験である。それは、彼女自身も、また出会った人々も互いに人格をもった1人の人間としての出会う経験だ。このような仲間の中にいる状況は、以下のような認識論を基盤にしていると言えるだろう。

- ①ダニエル＝ペネロプ自身の経験を知として捉え、その経験に学びあう関係の構築をめざしていること。
- ②抑圧の経験を、個人的な責任、生まれ持った宿命として捉えるのではなく、歴史的に構築された社会構造の問題として捉えていること。
- ③上述の①②の視点から、社会の中にある様々な抑圧的な諸関係の変革をめざしていること。

しかも、このダニエル＝ペネロプのアイデンティティの再構築と支援者としての力量形成のプロセスは段階的に発展している。すなわち、ダニエル＝ペネロプの意識は、初発の段階では、孤立した状況による抑圧された意識の状態にあった。しかし、次の段階では彼女自身の生活課題に関連したコミュニティと

の関係において、さらに、続く段階では「集団的な抑圧状況」に働きかけていくためのコミュニティとの関係において、自らの経験や実践を捉え返す実践と省察の往還を通じて、発展していく。こうした経験をふまえて、実践の省察と、スピリチュアリティを実践的アプローチとした先住民女性の支援者として、ミシナクのプロジェクトを始動させていくことになる。

最後に、記録⁴⁴やヒアリングの中で、ダニエル＝ペネロプ自身がこのような意識の発展に対して自覚的である点は重要である。そのことは、この意識の発展が定められたゴールを設定したものではなく、終わりが無いものであることを示唆している。むしろ、そのような自覚をもつことで、支援者として、目の前の先住民の女性と向き合うとき、彼女自身の意識の発展の時間の流れに伴走し、そのなかでともに自身の経験を再び振り返ることになるからだ。ダニエル＝ペネロプは、この意識の発展を、CQCで用いられている「意識のレベル」と表現し⁴⁵、次のように意味づけている。

私がこの意識のレベルがいいと思っているのは、他の人のことを理解する助けになるからなんです。(…) この意識のレベル [のフレーム] があると、もし自分が今、服従状態にいる人ならどうかなと問うことになります。

⁴⁴ 記録の中では、自分自身の意識の発展や、ミシナクの先住民女性たちの変容について、CQCの枠組みを用いて描写している (Guay et Tremblay, “Missinak”, 45; 51)。

⁴⁵ CQCでは、パウロ・フレイレの『被抑圧者の教育学』における意識化を、「あらゆる次元での解放の集団のプロセスとして、また終わりのない非単線的なプロセスとして」捉え、「アクションとの弁証法的な関係において作用する意識の歩み」と理解している。そのことから、「意識のレベル (niveaux de conscience)」を互いに関連し合う3タイプで説明している。例えば、その第1タイプでは、意識の初発のレベルは「非批判的意識」「魔法の意識」「服従の意識」、その次のレベルとして「革命的意識」「前・批判的意識」、さらに「批判的意識」「統合的批判的意識」・「開放的批判的意識」がある。これらは直線的な発展を遂げるものとして捉えられておらず、常に行きつ戻りつするものと考えられている。(Ampleman, Gisèle, Doré, Gérard, Lorraine, Gaudreau, Larose, Claude, Leboeuf, Louise et Denise Ventelou, « La conscientisation : Définition et principes d'action », *Les cahiers de la conscientisation*, no. 1, 1983, 8-10)。

〔その人が自分の状況を〕意識するために辿る道りを理解する助けになるんです。こういう解放のプロセスには、魔法はありませんからね。(…)あと、ああ私の場合もなんて長かっただろうって思うんです。10年、15年かかりました。長いですね、自己解放のプロセスは長いんです⁴⁶。

(4) ミシナクの展開

ミシナクのプロジェクトは、非先住民のコミュニティ・オーガナイザーの女性の助けを得ながら、リザーブに住む先住民の女性たちのニーズを聴き取ることから始まった。この取り組みは、マニトゥシユク女性サークルを生み出すことにつながっていた。このサークルは、この調査で出会った女性たちとともに立ち上げ、先住民の女性たちの居場所として、出会いの場として、さらには情報交流の場として機能している。メンバーは、様々な先住民文化の伝統的な手仕事の活動を行ったり、先住民女性の抑圧状況に関する学習活動、社会に向けた政治的なアクションにも取り組んでいる。

ミシナクの組織化が進む中で、活動の核となる2つのコミュニティが形成される。まずは、ウタルド・サークルというミシナクの理事会である。「ウタルド」とは、「雁が飛ぶ力のような連帯と力」を意味している⁴⁷。2003年の結成当初は、5名の先住民の女性、先住民コミュニティで働く人、協同組合の職員、3名の教員（うち男性1名）によって構成されていた。記録の中では、その後メンバー構成が変わり、マニトゥシユク女性サークルのメンバー6名と非先住民のメンバーで構成されている。先住民の女性たちは、集団を組織することが長く禁じられていたので、彼女たちにとってこのウタルド・サークルに関わることは、実際に集団の組織的運営を経験する場という点でも非常に重要である。ミシナクの活動方針は、「先住民の女性たちがこのプロジェクトの発信者であるべきであり、アクションのリーダーである。あらゆる代表を彼女たちが務め

⁴⁶ 2018年5月23日のヒアリング調査でのダニエル＝ペネロプの言葉。

⁴⁷ Guay et Tremblay, “Missinak”, 51.

るべきである」からだ⁴⁸。また、ミシナクの組織運営スタッフは、先住民の女性たちである。彼女たちは、ミシナクの施設を訪れる先住民の女性たちや子どもたちの言葉や文化を理解し尊重しながらサポートを行う。そして支援活動の質の向上を保証するためにも、スタッフが研修へ参加することが重視されており、CQCと連携しながらスタッフの研修が行われている。

次に、知恵の会である。ミシナクの活動を支える様々な領域の実践者たち（コミュニティ・オーガナイザー、大学教員、女性センターのスタッフ、先住民研究センターの相談員など）のコミュニティである。2003年、ミシナクは健康・福祉厚生省から公的認可を得るために、メンバーの一部が当時の大臣とも会談したにもかかわらず、政府の対応が非常に鈍かったため、政府に「圧力」をかける必要があった。そこで、その戦略を練るための委員会を結成すべく、人々に協力を呼びかけたのである⁴⁹。こうして結成された知恵の会のメンバーたちは、ミシナクが「より良い「省察を実践する」手助け」をするために「あらゆる方法で支え」、ミシナクがどんな困難な状況に置かれても、「方向を見失わないように助けてくれた」⁵⁰。

さらに、ミシナクのねらいやロゴの選択などを通して、コミュニティの組織化は進んでいき、2009年に宿泊型保護施設の開設に至る。また、マニトゥシュク女性サークルが中心となって、演劇やパレードなどの様々な文化的な活動を行いながら、先住民の女性たちが自身の文化を再発見し、共同的に自らのアイデンティティを再構築していった。そして、2018年に、先住民のあらゆる世代の女性、男性たちの多様な活動を支える場、マミュック・センターを設立する。2019年には自然の広場、メシュカヌーを公式オープンする。ミシナクのメンバー自身が、約10年かけて、土地の整備、建物の建設工事をしながら、先住民のスピリチュアリティの儀式を実践する場を作った。こうした儀式には非先住民

⁴⁸ *Ibid.*, 48.

⁴⁹ *Ibid.*, 53.

⁵⁰ *Ibid.*, 69.

も参加することができる。

さらに、ミシナクのメンバーは、大学や地域の団体に向けて、先住民の歴史を学ぶ活動も行っている。こうした活動を通して、先住民と非先住民の関係の再構築にも取り組んでいる。

ミシナクは、他のフェミニズム団体とも連携し合いながら、先住民の女性たちの諸権利を擁護する全国的または国際的なアクションも組織している（図の中のアムンパレードや世界女性パレードのこと）。特に、2017年から2019年にかけての「行方不明または殺害された先住民の女性と少女に関する全国調査」に関しては、2014年から、この調査が実施されるようカナダ政府とカナダ社会全体に働きかけてきた。そして、実施されると、全国調査委員会を支える取り組みを行う。すでに述べたように、ダニエル＝ペネロプは、グランメールとして、スピリチュアル的なサポートを行い、ケベック州での公聴会にも参加した。カナダ各地の公聴会の会場で、他の先住民の伝統工芸品とともに飾られているメッセージ付きのパッチワークは、ミシナクのメンバーで共同制作し全国調査委員会に贈ったものである。

（5）ミシナクを支えるネットワークの構造

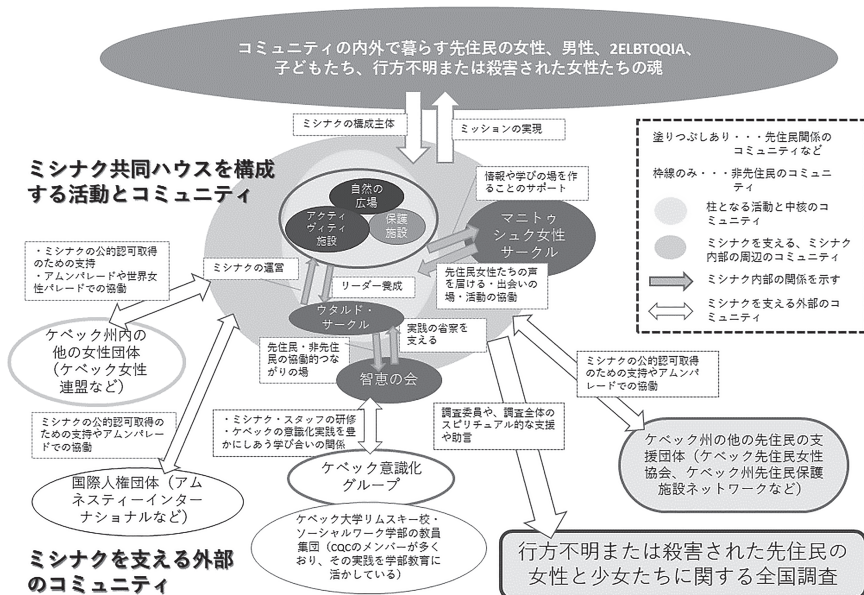
このように、ミシナクのプロジェクトは、様々な実践コミュニティを形成し、また他のコミュニティと連携しながら、展開していたと言える。こうしたミシナクの展開とネットワーク構造において重要な点は、次の3点である。1点目は、ミシナクのプロジェクトが、その発足当初から、先住民の女性たちの声を聴くということを通して始まっている点である。2点目は、ミシナクの展開過程において、マニトゥシユク女性サークル、ウタルド・サークルや、知恵の会などの実践コミュニティが生成されている点である。それらは、ミシナクの活動を省察しながら展開させていくことを支え、ミシナクと深い信頼関係を築いている。これらのコミュニティが、ミシナクの展開を支えるコミュニティとなっており、このコミュニティの活動自体が、異なる領域や階級の先住民、非先

住民の女性、男性たちが出会い、ともに先住民の女性たちの尊厳の回復のための道筋を探究している。3点目は、先住民女性問題解決をめざして、ケベック州内外の他の先住民女性団体や非先住民女性団体と連帯している点である。それが、全国調査の実現へと導き、ミシナクはその誠実な遂行を支援した。

なお付け加えると、知恵の会のメンバーの多くがCQCのメンバーである。CQCは知恵の会のメンバーの実践の省察を支えるコミュニティとして機能していた。このCQCは解散したが、このコミュニティが生み出してきた知は、現在、ケベック大学リムスキー校のソーシャル・ワーカー養成プログラムの中で生かされている。そして、同大学の教員たちと、ミシナクのメンバーは深い関わりをもっている。

最後に、ミシナクが支えているのは、生きている女性たちだけではない。「行方不明または殺害された女性たち」の魂を悼むための活動もミシナクは行っていること、また、先住民の精神世界では生と死は一体であることから、ミ

【図】ミシナクの展開を支えるコミュニティのネットワーク



シナクの活動は亡くなっている女性たちの尊厳の回復をも目指していると捉えられる。

おわりに

100年以上に及ぶ家父長制を構造化した植民地政策の結果、カナダの先住民の女性たちは、男性、全ての世代、コミュニティ、大地とのつながりを絶たれ、そのアイデンティティを轢き裂かれ、幾重にもわたる困難を抱えている。

ダニエル＝ペネロプの物語は、彼女自身のアイデンティティの再構築、さらには、先住民女性の支援者としての主体形成のプロセスであった。そこからは、インターセクショナルな状況の変革には、①長期的展望、②民族、性別、階級などの属性の多様性、そしてそれらの基づく経験の違いを聴き合う営みを通した、仲間との出会い、③異なる次元の多様なコミュニティが不可欠であることを読み取ることができた。

ミシナクのプロジェクトは、このダニエル＝ペネロプの経験と相似した構造をもつことがわかった。先住民女性のインターセクショナルな状況に働きかけるために、異なる機能をもつ有機的なコミュニティのつながりによって、ミシナクのプロジェクトは実現しており、さらにそのつながりは、互いの実践を省察的に支え合っている。また、ケベック州内外の異なる次元の先住民・非先住民の諸団体と連携し合いながら、カナダの先住民女性問題の解決のために闘っている。このように、ミシナクのプロジェクトは、有機的かつ複層的ネットワークを構築しながら、植民地支配の歴史を書き換えていっている。

以上、学習研究の観点からミシナクの長い時間をかけた歩みを辿ってきた。その歩みは、1人の先住民の女性と出会うことで、出会った人々が自らの足元を問い、彼女とともに、植民地支配の中で彼女が奪われた尊厳をともに取り戻し、そして信頼によって結ばれた諸関係をカナダ社会に編み込んでいく道りであった。その道りそのものが、植民地支配に終止符を打つための方途とし

て、ミシナクが生み出している知と言えるだろう。そこから、私たちは、カナダの植民地支配という文脈においてだけでなく、他の実践領域や地域においても、根深く構造化された抑圧の諸関係を組み替えて、信頼関係に基づく歴史を切り拓いていく糸口を学ぶことができるのではないかと考える。

参考文献

- Arnaud, Aurélie, « Féminisme autochtone militant : Quel féminisme pour quelle militance ? », *Nouvelles pratiques sociales*, vol. 27, no. 7 (2014) : 213-222.
- Association des femmes autochtones du Canada, *Ce que leurs histoires nous disent : Résultats de recherche de l'initiative Sœurs par l'esprit*. On line 2015. <https://nwac.ca/wp-content/uploads/2015/06/2010-What-Their-Stories-Tell-Us-Research-Findings-SIS-Initiative-FR.pdf>.
- Basil, Suzy, Asselin, Hugo, et Thibault Martin, « Le territoire comme lieu privilégié de transmission des savoirs et des valeurs des femme Atikamekw », *Recherches féministes*, vol. 30, no. 1 (2017) : 61-80.
- Bruno, Julie « Walking With Our Sisters : une commémoration artistique pour le féminicide autochtone, en marche vers la décolonisation », *Recherches féministes*, vol. 30, no. 1 (2017) : 101-117.
- Chacaby, Ma-Nee en collaboration avec Mary Louisa Plummer, *Un parcours bispirituel : Récit d'une aînée ojibwé-cri lesbienne*, Québec : les éditions du remue-ménage, 2019.
- Davis, Lynne (dir.), *Alliances : repenser les relations entre Autochtones et non-Autochtones*, Montréal : Les Presses de l'Université de Montréal, 2018.
- Enquête nationale sur les femmes et les filles autochtones disparues et assassinées (ENNFDFA), *Réclamer notre pouvoir et notre place. Le rapport final de l'enquête nationale sur les femmes et les filles autochtones disparues et assassinées. Volume 1a*. On line June 3 2019. <https://www.mmiwg-ffada.ca/wp-content/uploads/2019/06/Rapport-final-volume-1a-1.pdf>.
- Femmes autochtones du Québec, *Projet USSI-INIUN Étude sur l'abus sexuel chez les Premières Nations du Québec (Rapport final)*. On line March 31 2005. <http://www.faq-qnw.org/wp-content/uploads/2016/07/Rapportfinalabussexuels-Ussi-Iniun2005.pdf>.
- 藤高和輝「インターセクショナル・フェミニズムから／へ」, 『現代思想』, 第48巻4号, 3月臨時増刊号, 2020 : 34-47.

- Hargreaves, Allison, *Violence Against Indigenous Women: Literature, Activism, Resistance*, Wilfrid Laurier University Press, 2017.
- 広瀬健一郎「スティーヴン・ハーパー首相による元インディアン寄宿舎学校生徒への謝罪プロセス」, 『カナダ研究年報』, no. 30 (2010) : 65-71
- . 「カナダ首相による元インディアン寄宿舎学校生徒への謝罪に関する研究—謝罪への過程とその論理」, 『国際人間学部紀要』, no.17 (2010) : 13-44.
- Léger, Marie, « Des alliances multiformes : entrevues avec des militantes de Femmes Autochtones du Québec », *Recherches féministes*, vol. 30, no. 1, 2017 : 161-180.
- Maison communautaire de Missinak, 公式ホームページ. Accessed March 30, 2020. <https://www.missinak.org/>.
- . Facebookページ. Accessed March 30, 2020. <https://www.facebook.com/Missinak/>.
- Monture, Patricia, A., « Les mots des femmes [Women's Words]. Pouvoir, identité et souveraineté indigène », *Recherches féministes*, vol. 30, no. 1, 2017 : 15-27.